論 文 内 容 の 要 旨

氏　名	陳　紫軒
論 文 題 目	和製新漢語に関する研究 ―中国語での受容と和製新漢語の造語法―

要　旨

日本語の語彙はその歴史的な由来をもとに、日本語固有の語彙である「和語」、中国語に由来する「漢語」、西洋語に由来する「洋語（外来語）」に大別されるが、このうちの漢語については、中国語から借用されたものだけでなく日本で創出されたもの（和製漢語）も少なからず存在する。とりわけ近代の日本では、西洋からもたらされた新たな概念を表現するための翻訳語として、多数の漢字語（以下、「和製新漢語」）が作られた。それに関連して注目されるのは、近代の日本で創出された和製新漢語の一部が中国に流入し中国語の語彙として定着していったことである。

本論文では、近代に日本語から借用された和製新漢語を対象として、それらの語がどのような経緯で中国に流入したのかという近代の言語史に関わる問題と、中国語に受容された和製新漢語がどのような語の構成を持つのかという言語構造に関わる問題を考察する。その考察にあたって、本論文では、中国語話者が作成した『新爾雅』と英語話者が作成した *New Terms for New Ideas: A Study of the Chinese Newspaper*（以下、『*NEW TERMS*』）という 2 つの語彙集を主な資料として利用する。

上記の目標のもと、本論文は 3 つの部分で構成される。第 1 は、近代の中国語が和製新漢語を借用するに至った社会的・文化的状況を考察する部分、第 2 は、『新爾雅』と『*NEW TERMS*』に収録された語彙を歴史的な由来に基づいてどのように区分けできるのか、また、区分けされた語種（和製新漢語や中国製新漢語など）がそれぞれどのような特徴を有するのかを明らかにしようとする部分、そして第 3 は、それらの語種のなかの和製新漢語について、諸要素がどのように組み合わされることで語が形成されるのかを分析する部分である。本論文はこれら 3 つの部分を軸に、全体で 7 つの章で構成される。以下、章別にその概要を記す。

第 1 章では、本論文の研究背景・目的・構成を述べる。第 2 章では、先行研究の問題点を指摘したうえで「和製新漢語」という概念を規定する。また、語形と意味の関係をもとに、中国語に既に存在する語形に新たな意味が付与されて成立した和製新漢語を分立して「準和製新漢語」と命名し、本研究で扱う和製新漢語の範囲を明確にする。

第 3 章では、近代の日本と中国における社会的・文化的状況を概観しながら、和製新漢語が中国に流入した経緯を説明する。そのなかで、近代化を目指した中国が西洋の学問や技術を修得するために多数の留学生を日本に派遣したこと、その留学生のなかに留学を契機として日本語書籍の翻訳に注力した人々がいたこと、漢訳された日本語書籍が中国で流通した結果、数多くの和製新漢語が中国語に受容されるに至ったこと、などを指摘する。

第 4 章では、日本留学の経験を持つ中国人母語話者が作成した『新爾雅』を取り上げる。『新爾雅』は、西洋の概念・事物を表すための新語を集めたものであり、西洋由来の人文･自然科学分野の翻訳語を正確に理解したいという要求に応じて作成された語彙集である。この章では、同書に収録された語について、それらが出現する時期を『新爾雅』を含むいくつかの文献資料を比較することにより、中国と日本のどちらで作られたのか（すなわち、中国製の漢語か和製の漢語か）を、また、近代に作られたのかどうか（すなわち、中国製新漢語・和製新漢語かどうか）を判定する。そのうえで、それらの中国製新漢語や和製新漢語がどのような意味分野に属するのか、また、それらの語を構成する要素（「語基」）が中国製のものか和製のものかといった点の検討を通じて、近代の中国語に現れた新語の実相を解明する。

第 5 章では、前章の考察結果を受けて、『新爾雅』と同じ時期に米国人宣教師が作成した『*NEW TERMS*』を取り上げ、前章と同じ方法により、同書に収録された新語について､それらが中国製新漢語や和製新漢語などの語種のうちのどれに該当するのかを判定したうえで、当該の語がどのような意味分野に属するのか、また、その構成要素である語基が中国製のものか和製のものかといった点を調査･分析する。その結果を前章での調査･分析の結果と照らし合わせることで、考察を深めることが可能となる。本章ではさらに､『*NEW TERMS*』の初版（1913 年）から第 4 版（1922 年）の収録語を比較検討することにより、当時の中国語が短期間に新語（中国製新漢語、和製新漢語）の規模を拡大していったことを明らかにする。

第 6 章では､『新爾雅』と『*NEW TERMS*』に収録されている新語のなかの和製新漢語に焦点を当て､それらの語がどのような構成様式によって形成されるのかという造語法の問題を検討する。『新爾雅』と『*NEW TERMS*』の和製新漢語には主に、漢字 2 字からなる語（2 字語）から漢字 5 字からなる語（5 字語）までが認められるが、語の構成の基盤となるのは、漢字 1 字の語基（1 字語基）と漢字 2 字の語基（2 字語基）である。このうち特に重要な働きをする 2 字語基について、その語種を調べてみると、中国製の語基が多くを占めることが判明する。このことから、和製新漢語は語全体としては和製であるものの､語構成の面から見れば中国製の要素が重要な役割を果たしていると言える。

最後に、第 7 章では、和製新漢語が近代の中国語に受容された経緯、及び、受容された和製新漢語の造語法の有り様について本論文でどのような点を明らかにすることができたかを要約する。併せて、今後の課題として、中国製新漢語に対して詳しい分析を施すとともに、和製新漢語との比較研究を深めていく必要があることを述べる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名	陳　紫軒
論 文 題 目	和製新漢語に関する研究 ―中国語での受容と和製新漢語の造語法―

要　旨

近代の日本語を特徴づけるものの１つが日本で創出された漢字語（和製漢語）である。西洋の文明・文化から大きな影響を受けた近代の日本は、新たな概念や事物を表現するための新語を必要とすることとなり、それに対応するため、造語力の高い漢字を用いて多数の和製漢語を創出していったのである。さらに興味深い点は、日本で作られた和製漢語の一部が漢字・漢語の本家である中国に流入し、中国語の語彙として定着していったことである。

日本語における漢語は、本来的には中国語に由来するものであり、日本語にとっては借用語にほかならない。それに対して、日本で創出された和製漢語は、借用した漢字を用いて新たに造語したものであるという点で、借用語の面と固有語の面を併せ持つ特異な存在であると言うことができる。この特異な存在である和製漢語を借用語として受容したのが中国語のなかで使用されている和製漢語である。和製漢語は中国語にとっても、漢字が用いられている点では固有語の面を持ち、日本で造語されたという点では借用語の面を持つ。固有語と借用語は区別して捉えられるのが一般的であることからすると、和製漢語の特異性は際立っており、そこに和製漢語研究の大きな意義が認められることになる。

本論文は、中国語に取り入れられた近代の和製漢語（本論文では、「和製新漢語」と称される）を主な対象として、それらがどのような経緯で中国語に受容されるに至ったのかという言語史の面と、どのような造語法に従って創出されたのかという言語構造の面に着目して新たな知見を提出しようとするものである。和製新漢語の研究は日本側の資料と中国側の資料をもとに進められているが、本論文では、和製新漢語を受容した中国側の資料に重点を置き、中国語母語話者が作成した語彙集『新爾雅』と英語母語話者が作成した語彙集 *New Terms for New Ideas* を主たる対象として考察が加えられている。考察の対象として母語の異なる作成者による２つの資料が選ばれた点には、広い視野から研究を遂行しようとする著者の姿勢が窺われる。

そのような姿勢で書かれた本論文の成果として評価されるのは以下の３点である。とりわけ（2）と（3）は、和製新漢語の研究に対する貢献として高く評価されるところである。

（1）先行研究を踏まえたうえで、「和製新漢語」（語形そのものが新たに創出された語）と「準和製新漢語」（既存の語形に新たな意味が付与された語）を区別するなど、和製漢語における語種の区分を明確にしたこと。

（2）2 つの語彙集（『新爾雅』と *New Terms for New Ideas*）に収録されている語を対象に、関係する資料における出現状況（初出の時期など）を詳細に調査・分析することにより、和製新漢語を実証的に抽出したこと。
（3）抽出された和製新漢語を対象として、その語構成の様相を構成要素（語基）の語種に着目することにより、詳しく分析したこと。

高い評価が与えられる（2）と（3）は、同時にまた、今後のさらなる検討が望まれる事項でもある。著者による和製新漢語研究の進展に期待し、今後の課題として以下の点を記しておく。

（2）の和製新漢語の抽出は、和製新漢語研究の基盤をなすものであるが、当該の語が和製新漢語であることの判定をより確実なものにするため、さらに広範な資料を用いた調査・分析が求められる。

（3）の語構成の問題について、語種の概念に軸足を置く本論文では、当該の和製新漢語がどのような語種の語基で構成されているかという観点から分析が施されているが、いくつかの先行研究で試みられているように、語の文法的なカテゴリーである品詞の観点からの分析も重要な検討事項であると言える。また、中国製新漢語における語構成の様相との比較研究が行われれば、和製新漢語の造語法の研究をさらに深めることが可能となる。

以上述べたとおり、本論文が提起する課題は日中の言語交流に関わる有意義な研究課題であり、その研究成果にも多くの新たな知見が認められることから、博士論文に求められる水準を十分満たすものと判断される。本研究を出発点として、著者の今後の研究がさらに進展していくことを期待するものである。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	益岡　隆志
副査	教授	靳 衛衛
副査	教授	柿木 重宜

最 終 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名	陳　紫軒
試 験 科 目	
判　定	合　格　・　不　合　格

要　旨
学位申請者の博士後期課程での研究成果を審査するため、2023 年 6 月 21 日に博士論文を主たる対象として公開の口述試験を実施した。 口述試験では、申請者による博士論文の内容に関する報告に続いて、申請者と審査委員とのあいだで博士論文の目的・意義、論点・結論、論述の構成などについて質疑応答が行われた。審査委員からの質問に対する申請者の回答は的確なものであり、申請者の研究成果が高い評価に値するものであることが確認された。また、博士論文の研究成果の一部は、日中対照言語学会、東アジア国際言語学会など国内外での学会で口頭発表され、学外での評価も得ている。 申請者の外国語の試験については、日本語で執筆された博士論文と日本語・英語・中国語で書かれた要約における表現力により判断し、試験を免除した。 以上の評価に基づき、審査委員会は全員一致で本論文に対する博士（言語文化）の学位授与を適格と認め、合格と判断した。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	益岡　隆志
副査	教授	靳 衛衛
副査	教授	柿木 重宜